

D_{2n} 型格子の数理構造について

幸山 直人¹・松本 哲也²・長沼 英久³
(¹富山大学理学部数学教室・²NTT・³理学部情報科学教室)

On the mathematical structure of D_{2n} -lattices

Naoto KOUYAMA¹, Tetsuya MATSUMOTO², and Hidehisa NAGANUMA³

¹Department of Mathematics, Faculty of Science, Toyama University

²NTT; ³Department of Information Science, Faculty of Science

Abstract: In this note we shall investigate the mathematical structure of D_{2n} -lattices, which are only infinite system coming from 2-adic codes. Firstly, we show that their theta functions become holomorphic modular forms of weight n with respect to certain congruence subgroups of $SL_2(\mathbf{Z})$. Secondly, we decompose them into Eisenstein series and cusp forms. As the application we obtain the following two facts: (1) Every even lattice $\Lambda \subset \mathbf{R}^6$ such that $\Lambda^*/\Lambda \cong \mathbf{Z}/2\mathbf{Z} \times \mathbf{Z}/2\mathbf{Z}$ must be D_6 -lattice. (2) We can construct a cusp form and also new form of $\Gamma_0(2)$ if $n \equiv 0 \pmod{2}$ and the dimension of the space of all cusp forms of weight n with respect to $SL_2(\mathbf{Z}) \leq 1$.

キーワード: D_{2n} 型格子, 正則保型形式.

結 果

既約な根格子は Witt の構造定理によって作られる Coxeter-Dynkin 図形により, A_j ($j \geq 1$), D_k ($k \leq 4$), E_l ($6 \leq l \leq 8$) 型に分類されるが, この中で 2 進符号から得られるものは, A_1 , D_{2n} ($n \geq 2$), E_7 , E_8 だけである(例えば, Ebeling²⁾ Chap.1 参照). 本論文では, その中で唯一つの無限系列である D_{2n} 型格子について調べる. 一般に, 格子 Λ のテータ関数 Θ_Λ (上半平面 \mathcal{H} 上の関数) を次の式で定義する.

$$\Theta_\Lambda(z) = \sum_{x \in \Lambda} e^{miz^2} \quad (z \in \mathcal{H})$$

また, Λ の双対格子を Λ^* で表すことにする. D_{2n} 型格子を D_{2n} で表せば, $D_{2n}^*/D_{2n} \cong \mathbf{Z}/2\mathbf{Z} \times \mathbf{Z}/2\mathbf{Z}$ であるが, より一般に次の定理が成り立つ.

定理 1 Λ を $\Lambda^*/\Lambda \cong \mathbf{Z}/2\mathbf{Z} \times \mathbf{Z}/2\mathbf{Z}$ であるような $2n$ 次元偶格子とすれば, Θ_Λ は $\Gamma_1(4)$ (定義は 2.1 を見よ) に関する重さ n の正則保型形式になる.

正整数 n , 上半平面 \mathcal{H} の点 z , \mathcal{H} 上の関数 f , $GL_2(\mathbf{Z})$ の元 $A = \begin{bmatrix} a & b \\ c & d \end{bmatrix}$ に対して

$$\begin{aligned}
 Az &= \frac{az+b}{cz+d} \\
 j(A, z) &= cz+d \\
 (f|_n A)(z) &= (\det A)^{\frac{n}{2}} j(A, z)^{-n} f(Az)
 \end{aligned} \tag{1.1}$$

と置く. D_{2n} 格子のテータ関数を Θ_{2n} で表し, $\Gamma(\Theta_{2n})$ を

$$\Gamma(\Theta_{2n}) = \{ \gamma \in SL_2(\mathbb{Z}) : \Theta_{2n}|_n \gamma = \Theta_{2n} \}$$

で定義する. $\Gamma(\Theta_{2n})$ は次のようになる.

$$\text{定理 2} \quad \Gamma(\Theta_{2n}) = \begin{cases} \Gamma_0(2) & (n \equiv 0 \pmod{2}), \\ \Gamma_1(4) & (n \equiv 1 \pmod{2}). \end{cases}$$

一般に $SL_2(\mathbb{Z})$ の指数有限の部分群 Γ に対して, Γ に関する重さ n の正則保型形式の全体からなる線形空間を $M_n(\Gamma)$, 尖点形式の全体からなる部分空間を $S_n(\Gamma)$, $M_n(\Gamma)$ における $S_n(\Gamma)$ の Petersson 内積に関する直交補空間を $\mathcal{N}_n(\Gamma)$ で表す. $\mathcal{N}_n(\Gamma(\Theta_{2n}))$ の次元は, $n=2$ のとき 1 であり, $n>2$ のとき 2 であるが, 基底は次の Eisenstein 級数によって与えられる. χ_0 で自明な, χ で mod 4 の原始的な Dirichlet 指標を表すものとし, $\chi_1, \chi_2 \in \{\chi_0, \chi\}$ を $\chi_1 \chi_2(-1) = (-1)^n$ とする. また, $B_{n, \chi_1 \chi_2}$ で指標 $\chi_1 \chi_2$ の n 番目の一般化された Bernoulli 数を表し, $B_n = B_{n, \chi_0}$ で表す.

$$\begin{aligned}
 \sum_{m=1}^{\infty} a_m(\chi_1, \chi_2; n) m^{-s} &= L(s, \chi_1) L(s-n+1, \chi_2), \\
 a_0(\chi_1, \chi_2; n) &= \begin{cases} \frac{1}{8} & (n=2, \chi_1 = \chi_2 = \chi_0), \\ \frac{-B_{n, \chi_1 \chi_2}}{2n} & (\text{その他の場合}), \end{cases} \\
 f_n(z; \chi_1, \chi_2) &= \sum_{m=0}^{\infty} a_m(\chi_1, \chi_2; n) e^{2\pi i m z} \quad (z \in \mathcal{H})
 \end{aligned}$$

と置けば,

$$\mathcal{N}_n(\Gamma(\Theta_{2n})) = \begin{cases} \mathcal{C}f_2(z; \chi_0, \chi_0) & (n=2), \\ \mathcal{C}f_n(z; \chi_0, \chi_0) \oplus \mathcal{C}f_n(2z; \chi_0, \chi_0) & (n \equiv 0 \pmod{2}, n>2), \\ \mathcal{C}f_n(z; \chi_0, \chi) \oplus \mathcal{C}f_n(2z; \chi, \chi_0) & (n \equiv 1 \pmod{2}) \end{cases}$$

となる. ここで, 次に正規化された Eisenstein 級数を考えることにする.

$$\begin{aligned}
 E_n^{(1)}(z) &= \begin{cases} a_0(\chi_0, \chi; n)^{-1} f_n(z; \chi_0, \chi) & (n \equiv 1 \pmod{2}), \\ a_0(\chi_0, \chi_0; n)^{-1} f_n(z; \chi_0, \chi_0) & (n \equiv 0 \pmod{2}), \end{cases} \\
 E_n^{(2)}(z) &= \begin{cases} f_n(z; \chi, \chi_0) & (n \equiv 1 \pmod{2}), \\ a_0(\chi_0, \chi_0; n)^{-1} f_n(2z; \chi_0, \chi_0) & (n \equiv 0 \pmod{2}). \end{cases}
 \end{aligned}$$

$n=2$ のとき, $M_2(\Gamma(\Theta_4)) = \mathcal{N}_2(\Gamma(\Theta_4))$ となるので, $\Theta_4 = E_2^{(1)}$ を得る. そこで $n>2$ とする. このとき

$$\Theta_{2n} = x_n E_n^{(1)} + y_n E_n^{(2)} + F$$

を満たす 2 つの複素数 x_n, y_n と $S_n(\Gamma(\Theta_{2n}))$ の元 F が一意に定まる. 結果は次のとおりである.

定理3 $n > 2$ とする.

$$x_n = \begin{cases} 1 & (n \equiv 1 \pmod{2}), \\ \frac{-1 + (-1)^n 2^{2n-1}}{2^{2n-1}} & (n \equiv 0 \pmod{2}), \end{cases}$$

$$y_n = \begin{cases} \frac{n(-1)^{(1-3n)/2} 2^{2n-1}}{B_{n,z}} & (n \equiv 1 \pmod{2}), \\ \frac{(2 - (-1)^n) 2^{2n-1}}{2^{2n} - 1} & (n \equiv 0 \pmod{2}). \end{cases}$$

定理3の x_n, y_n を用いれば, $\Theta_{2n} - x_n E_n^{(1)} - y_n E_n^{(2)}$ は $S_n(\Gamma(\Theta_{2n}))$ の元, 即ち, $\Gamma(\Theta_{2n})$ に関する重さ n の尖点形式になる. これを Ξ_n と置く.

さて, E_8 格子は8次元ユニモジュラー偶格子であるが, 逆に, 8次元ユニモジュラー偶格子 Λ が E_8 型格子になることを, $\Theta_\Lambda = E_8^{(1)}$ から導くことができる (Ebeling²⁾ Prop. 2.5参照). この事実の類似として次の結果を得る.

定理4 Λ を $\Lambda^*/\Lambda \cong \mathbf{Z}/2\mathbf{Z} \times \mathbf{Z}/2\mathbf{Z}$ であるような6次元偶格子とすれば, Λ は D_6 型格子である.

次に, n を偶数とすると, $S_n(\Gamma(\Theta_{2n})) = S_n(\Gamma_0(2))$ は部分空間

$$S_n^*(\Gamma_0(2)) = S_n(\Gamma(1)) \oplus \{f(2z) : f \in S_n(\Gamma(1))\}$$

及び, その直交補空間 $S_n^*(\Gamma_0(2))$ との直和に分解される. $\dim S_n(\Gamma(1)) = 1$ の場合を考える. その正規化された基底 $g_n (= E_n^{(1)} \Delta)$ を用いれば,

$$\Xi_n(z) = z_n g_n(z) + w_n g_n(2z) + F_0(z) \tag{1.2}$$

を満たす2つの複素数 z_n, w_n と $S_n^*(\Gamma_0(2))$ の元 F_0 とが一意に定まる.

定理5 n を偶数とすると, (1.2) を満たす z_n と w_n とが具体的に求まる (§3.5). 従って, $S_n^*(\Gamma_0(2))$ の元

$$\Theta_{2n}(z) - x_n E_n^{(1)}(z) - y_n E_n^{(2)}(z) - z_n g_n(z) - w_n g_n(2z)$$

を得る.

保型形式についての準備

2.1 合同部分群 $\Gamma_0(2), \Gamma_1(4)$

正整数 n , 上半平面 \mathcal{H} の点 z , \mathcal{H} の関数 f と $GL_2^+(\mathbf{R})$ の元 $A = \begin{bmatrix} a & b \\ c & d \end{bmatrix}$ とに対して, 次のように定義する.

$$a(A) = a, b(A) = b, c(A) = c, d(A) = d.$$

また, $Az, j(A, z), (f|_n A)(z)$ を(1.1)のように定義すれば, $GL_2^+(\mathbf{R})$ の任意の2元 A, B に対して,

$$f|_n AB = (f|_n A)|_n B$$

が成り立つ (例えば, Miyake³⁾ の §2.1参照).

本論文では, $SL_2(\mathbf{Z})$ の次の2つの部分群を扱うことになる.

$$\Gamma_0(2) = \{A \in SL_2(\mathbf{Z}) : c(A) \equiv 0 \pmod{2}\},$$

$$\Gamma_1(4) = \{A \in SL_2(\mathbf{Z}) : a(A) - 1 \equiv c(A) \equiv d(A) - 1 \equiv 0 \pmod{4}\}.$$

これらの群の生成元を記述するために, 次のように置く.

$$U = \begin{bmatrix} 1 & 1 \\ 0 & 1 \end{bmatrix}, \quad V = \begin{bmatrix} 0 & -1 \\ 1 & 0 \end{bmatrix}, \quad W = \begin{bmatrix} 1 & 0 \\ 1 & 1 \end{bmatrix},$$

このとき, 次の事実が知られている. (例えば, Rankin⁴⁾参照).

補題 1 (1) $\Gamma_0(2)$ は U と W^2 で生成される.

(2) $\Gamma_1(4)$ は U と W^4 で生成される.

補題 2 $\Gamma_1(4)$ は $SL_2(\mathbf{Z})$ の部分群で $-I$ を含まないものの中で, 極大元である.

2.2 作用素 ω_n と Tr_n

$$\delta = \begin{cases} 2 & (n \equiv 0 \pmod{2}), \\ 4 & (n \equiv 1 \pmod{2}), \end{cases} \quad (2.1)$$

$$\omega_n = \begin{bmatrix} 0 & -1 \\ \delta_n & 0 \end{bmatrix}, \quad \Delta_n = \begin{bmatrix} \delta_n & 0 \\ 0 & 1 \end{bmatrix}$$

と置けば, $\omega_n^{-1} \Gamma(\Theta_{2n}) \omega_n = \Gamma(\Theta_{2n})$ が成り立つので, 任意の $f \in M_n(\Gamma(\Theta_{2n}))$ に対して, $f|_n \omega_n \in M_n(\Gamma(\Theta_{2n}))$ が成り立つ. 特に,

$$c_n = \begin{cases} 2^{\frac{n}{2}} & (n \equiv 0 \pmod{2}), \\ i2^{\frac{n}{2}} & (n \equiv 1 \pmod{2}) \end{cases} \quad (2.2)$$

と置けば, 正規化された Eisenstein 級数 $E_n^{(1)}, E_n^{(2)}$ について

$$\begin{aligned} E_n^{(1)}|_n \omega_n &= c_n E_n^{(2)}, \\ E_n^{(2)}|_n \omega_n &= (-1)^n c_n E_n^{(1)} \end{aligned} \quad (2.3)$$

が成り立つ. また, 任意の $f \in S_n(\Gamma(\Theta_{2n}))$ に対して, $f|_n \omega_n \in S_n(\Gamma(\Theta_{2n}))$ も成り立ち, n が偶数のとき, $f \in S_n^0(\Gamma_0(2))$ に対して, $f|_n \omega_n \in S_n^0(\Gamma_0(2))$ が成り立つ.

n が偶数のとき, $f \in M_n(\Gamma_0(2))$ に対して, トレース写像 Tr_n を

$$Tr_n(f) = f + f|_n V + f|_n W$$

によって定義する. $\{I, V, W\}$ は $\Gamma_0(4) \setminus \Gamma(1)$ の完全代表系だから, $Tr_n(f) \in M_n(\Gamma(1))$ であることが分かる. 特に, $f \in M_n(\Gamma(1))$ に対しては,

$$\begin{aligned} Tr_n(f) &= 3f, \\ Tr_n(f|_n \omega_n) &= 2^{1-n} T_n(2) f \end{aligned}$$

が成り立つ. 但し, $T_n(2)$ は $M_n(\Gamma(1))$ 上の Hecke 作用素である. また, $f \in S_n^0(\Gamma_0(2))$ に対しては, $Tr_n(f) = 0$ となることも分かる.

証 明

3.1 定理1の証明

Λ を定理1の仮定を満たす $2n$ 次元偶格子とする. まず, Λ は偶格子であるから, $\{x^2 : x \in \Lambda\} \subseteq 2\mathbf{Z}$ である. 従って,

$$(\Theta_\Lambda |_{2n} U)(z) = \Theta_\Lambda(z+1) = \Theta_\Lambda(z) \tag{3.1}$$

が成り立つ. また, $\Lambda^*/\Lambda \cong \mathbf{Z}/2\mathbf{Z} \times \mathbf{Z}/2\mathbf{Z}$ より, $2\Lambda^* \subseteq \Lambda$ となるので, $\{(2y)^2 : y \in \Lambda^*\} \subseteq 2\mathbf{Z}$ となる. 従って,

$$(\Theta_{\Lambda^*} |_{2n} U^4)(z) = \Theta_{\Lambda^*}(z+4) = \Theta_{\Lambda^*}(z) \tag{3.2}$$

が成り立つ.

一般に, $2n$ 次元格子 Λ について, Poisson の和公式から, 次の式が成り立つ.

$$(\Theta_\Lambda |_{2n} V) = i^{-n} (\Lambda^* : \Lambda)^{-1/2} \Theta_{\Lambda^*}$$

今, Λ が定理1の仮定を満たすとすれば, $\Lambda^*/\Lambda \cong \mathbf{Z}/2\mathbf{Z} \times \mathbf{Z}/2\mathbf{Z}$ ($\Lambda^*/\Lambda = 4$), 従って,

$$(\Theta_\Lambda |_{2n} V) = i^{-n} 2^{-1} \Theta_{\Lambda^*} \tag{3.3}$$

となる. (3.3) と (3.2) とにより, $\Theta_\Lambda |_{2n} W^4 = \Theta_\Lambda |_{2n} V U^{-4} V^{-1} = (\Theta_\Lambda |_{2n} V) |_{2n} U^{-4} V^{-1} = (i^{-n} 2^{-1} \Theta_{\Lambda^*}) |_{2n} U^{-4} V^{-1} = i^{-n} 2^{-1} (\Theta_{\Lambda^*} |_{2n} U^{-4}) |_{2n} V^{-1} = i^{-n} 2^{-1} \Theta_{\Lambda^*} |_{2n} V^{-1} = \Theta_\Lambda$ となり,

$$\Theta_\Lambda |_{2n} W^4 = \Theta_\Lambda \tag{3.4}$$

が成り立つ. 偶格子 Λ については, Θ_Λ の正則性は明らかであるから, (3.1) と (3.4) と補題1 とから, $\Theta_\Lambda \in M_n(\Gamma_1(4))$ が示された. これで定理1は証明された.

3.2 定理2の証明

格子 D_{2n} は定理1の仮定を満たすから, $\Gamma(\Theta_{2n}) \supseteq \Gamma_1(4)$ である. そこで, n を奇数とすれば, 補題2より, $\Gamma_1(4)$ が $SL_2(\mathbf{Z})$ の部分群で $-I$ を含まないものの中で極大元であることから, $\Gamma(\Theta_{2n}) = \Gamma_1(4)$ が分かる. 次に, n を偶数とする. このとき, D_{2n}^* の全ての元に対して $y^2 \in \mathbf{Z}$ が成り立つから, D_{2n}^* のテータ関数を Θ_{2n}^* で表すとき, 次の式が成り立つ.

$$\Theta_{2n}^* |_{2n} U^2 = \Theta_{2n}^*(z+2) = \Theta_{2n}^* \tag{3.5}$$

従って, (3.3) と (3.5) とにより, $\Theta_{2n} |_{2n} W^2 = \Theta_{2n} |_{2n} V U^{-2} V^{-1} = (\Theta_{2n} |_{2n} V) |_{2n} U^{-2} V^{-1} = (i^{-n} 2^{-1}) (\Theta_{2n}^* |_{2n} V^{-1}) = (i^{-n} 2^{-1}) (i^n 2 \Theta_{2n}^*) = \Theta_{2n}$ となり,

$$\Theta_{2n} |_{2n} W^2 = \Theta_{2n} \tag{3.6}$$

が示された. この結果, 補題1から, $\Gamma(\Theta_{2n}) \supseteq \Gamma_0(2)$ が分かる. $V \notin \Gamma(\Theta_{2n})$ から $\Gamma(\Theta_{2n}) \neq SL_2(\mathbf{Z})$ であるので, $\Gamma(\Theta_{2n}) = \Gamma_0(2)$ が証明できた.

3.3 定理3の証明

$n > 2$ とし,

$$\begin{aligned} \Theta_{2n} &= x_n E_n^{(1)} + y_n E_n^{(2)} + F \\ x_n, y_n &\in \mathbf{C}, \quad F \in S_n(\Gamma(\Theta_{2n})) \end{aligned} \tag{3.7}$$

とする. (2.1) から

$$\Theta_{2n} |_{2n} \omega_n = x_n c_n E_n^{(2)} + y_n (-1)^n c_n^{-1} E_n^{(1)} + F |_{2n} \omega_n \tag{3.8}$$

を得る. 一方,

$$\Theta_{2n}|_n \omega_n = \Theta_{2n}|_n V \Delta_n = i^{-n} 2^{-1} \Theta_{2n}^*|_n \Delta_n = i^{-n} 2^{-1} \delta_n \Theta_{2n}^* (\delta_n z)$$

であることと(3.7)と(3.8)の定数項を考えれば、次の式を得る.

$$x_n + (1 + (-1)^n) 2^{-1} y_n = 1 \quad (3.9)$$

$$(1 + (-1)^n) 2^{-1} c_n x_n + (-1)^n c_n^{-1} y_n = i^{-n} 2^{-1} \delta_n \quad (3.10)$$

従って、(2.1), (2.2)より定理3を得る.

3.4 定理4の証明

Λ を6次元偶格子で、 $\Lambda^*/\Lambda \cong \mathbf{Z}/2\mathbf{Z} \times \mathbf{Z}/2\mathbf{Z}$ であるとする. 定理1から、 $\Theta_\Lambda \in M_3(\Gamma_1(4))$ であるが、 $M_3(\Gamma_1(4)) = CE_3^{(1)} \oplus CE_3^{(2)}$ であるから、

$$\Theta_\Lambda = uE_3^{(1)} + vE_3^{(2)}$$

となる. まず、 $u=1$ が分かるが、 $B_3, \chi = \frac{2}{3}$ であることから、

$$E_3^{(1)}|_3 \omega_4 = -16iE_3^{(2)}$$

が成り立つので、

$$\Theta_\Lambda|_3 \omega_4 = u(-16i)E_3^{(2)} + v(16i)^{-1}E_3^{(1)}$$

となる. 従って、 $i^{-3} 2^2 = v(16i)^{-1}$ となり、 $v = -64$ が得られる. 即ち、 $\Theta_\Lambda = E_3^{(1)} - 64E_3^{(2)} = \Theta_6$ となり、

$|R_\Lambda| = \left(-\frac{6}{(3/2)}\right) + 64 = 60$ となる. いま、 Λ' を R_Λ で生成される部分格子とすれば、 Λ' は6次元よりは小さい次元の根格子になるが、 $|R_{\Lambda'}| = |R_\Lambda| = 60$ となる. このような Λ' が D_6 しかないことは容易に確かめられる. $D_6 = \Lambda' \subset \Lambda \subset \Lambda^* \subset (\Lambda') = D_6^*$ と $(\Lambda^* : \Lambda) = (D_6^* : D_6) = 4$ より、 $\Lambda = D_6$ が示される.

3.5 定理5の証明

n を偶数で、 $n > 2$ とする. このとき、定理2から $\Gamma(\Theta_{2n}) = \Gamma_0(2)$ であり、定理3の x_n, y_n を用いて、 $\Xi_n = \Theta_{2n} - x_n E_n^{(1)} - y_n E_n^{(2)}$ と置けば、 $\Xi_n \in S_n(\Gamma_0(2))$. 従って、 $\Xi_n|_n \omega_n \in S_n(\Gamma_0(2))$ であるから(2.3)を考えれば、

$$Tr_n(\Xi_n) = (3z_n + w_n 2^{1-n} c(2, g_n)) g_n \quad (3.11)$$

$$Tr_n(\Xi_n|_n \omega_n) = (2^{1-n/2} c(2, g_n) + 3 \cdot 2^{-n/2}) g_n \quad (3.12)$$

を得る. 但し、 $c(2, g_n)$ は g_n の q^2 の係数である.

一方、Conway and Sloane¹⁾によれば、 Θ_{2n} がJacobiのテータ関数で表されることを用いると次の補題が分かる.

補題3 (1) $Tr_n(\Theta_{2n}) = 2 + 8 \cdot {}_{2n}C_{2q} + \dots$

(2) $Tr_n(\Theta_{2n}|_n \omega_n) = ((-1)^{n/2} 2^{n/2-1} + 2^{1-n/2})$
 $+ ((-1)^{n/2} 2^{1+n/2} n + 2^{3-n/2} (n + 4 \cdot {}_{2n}C_4)) q + \dots$

証明 3つのJacobiのテータ関数

$$\theta_n(z) = 2q^{1/8} \prod_{j=1}^{\infty} (1-q^j)(1+q^j)^2,$$

$$\theta_2(z) = \prod_{j=1}^{\infty} (1 - q^j)(1 + q^{j-1/2})^2$$

$$\theta_3(z) = \prod_{j=1}^{\infty} (1 - q^j)(1 - q^{j-1/2})^2$$

を用いれば,

$$\Theta_{2n} = \frac{\theta_3^{2n} + \theta_4^{2n}}{2}$$

となる. $\theta_i (i = 1, 2, 3)$ の変換公式によれば,

$$\begin{aligned} Tr_n(\Theta_{2n}) &= (\theta_3^{2n} + \theta_4^{2n})(1 + (-1)^{n/2}) / 2 \\ Tr_n(\Theta_{2n} | \omega_n) &= 2^{n/2} (-1)^{n/2} \theta_3(2z)^{2n} + 2^{n/2} (-1)^{n/2} \theta_2(2z)^{2n} \\ &\quad + 2^{n/2} \theta_3(z/2)^{2n} + 2^{-n/2} \theta_4(z/2)^{2n} \\ &\quad + 2^{-n/2} \theta_4((z+1)/2)^{2n} + 2^{-n/2} \theta_4((z+1)/2)^{2n} \end{aligned}$$

を得るので, これからの補題の主張が得られる.

補題 3 から次の 2 式を得る.

$$\begin{aligned} Tr_n(\Xi_n) &= (1 + (-1)^{n/2})(4 \cdot {}_{2n}C_2 + 2nB_n^{-1})q + \dots \\ Tr_n(\Xi_n | \omega_n) &= (((-1)^{n/2} 2^{n/2} + 2^{2-n/2})(2 + B_n^{-1}) 2n + 2^{5-n/2} {}_{2n}C_4)q + \dots \end{aligned}$$

これより,

$$\begin{aligned} 3z_n + 2^{1-n} c(2, g_n) w_n &= (1 + (-1)^{n/2})(4 \cdot {}_{2n}C_2) + 2nB_n^{-1} \\ 2^{1-n/2} c(2, g_n) z_n + 3 \cdot 2^{1-n/2} w_n &= ((-1)^{n/2} 2^{n/2} + 2^{2-n/2})(2 + B_n^{-1})n + 2^{5-n/2} + {}_{2n}C_4 \end{aligned}$$

となり, この 2 式から, z_n, w_n を求めれば次のようになる.

n	z_n	w_n
$n \equiv 2 \pmod{4}$	$2c(2, g_n) P_n$	$-3 \cdot 2^n P_n$
$n \equiv 0 \pmod{4}$	$\{2(4 \cdot {}_{2n}C_2 + 2nB_n^{-1}) + 2^{-n/2} c(2, g_n) Q_n\} / 3$	$-Q_n$

但し, P_n, Q_n は次の式で与えられる.

$$\begin{aligned} P_n &= \frac{-32 {}_{2n}C_4 + (4 - 2^n) 2n}{9 \cdot 2^n - 4c(2, g_n)^2} + \frac{(4 - 2^n) 2nB_n^{-1}}{18 \cdot 2^n - 8c(2, g_n)^2} \\ Q_n &= \frac{16 \cdot 2^{n/2} {}_{2n}C_2 - 3 \cdot 2^{n/2} (32 {}_{2n}C_4 + 2n(4 + 2^n))}{9 \cdot 2^{n/2} - 4c(2, g_n)^2} \\ &\quad + \frac{(8 \cdot 2^{n/2} c(2, g_n) 2n - 3 \cdot 2^{n/2} (4 + 2^n) B_n^{-1})}{18 \cdot 2^{n/2} - 8c(2, g_n)^2} \end{aligned}$$

注意 $\dim S_n(\Gamma(1)) = 1$ が成り立つのは $n = 12, 16, 18, 20, 22, 26$ のときである.

文 献

- 1) J.H.Conway and N.J.A.Sloane : Sphere Packings, Lattices and Groups, Springer-Verlag, 1988.
- 2) W.Ebeling : Lattices and Codes, Vieweg Publishing, 1994.
- 3) T.Miyake : Modular Forms, Springer-Verlag, 1989.
- 4) R.Rankin : Modular forms and functions, Cambridge Univ. Press, 1977.

平成9(1997)年9月5日受理

平成9(1997)年12月25日発行